
特別企画

事務局長20年の思い出（後編）

小田中 徹也

I. はじめに

前編では、1983年から1994年暮れまでの前半をいわば牧歌的な10年として振り返りました。ところが、翌1995年1月の阪神・淡路大震災から2004年3月の事務局長退任までの後半は、私にとって気持ちの上では休む間のない激動の10年でした。すなわち、大震災、それと同時期に出現し世界的に普及したインターネット、病院図書室研究会との共同事業、京都大学大学院医学研究科とのEBMワーキンググループ活動、著作権法上の病院図書館認知活動、それらに次々と、あるいは同時に立ち向かっていった10年間でした。そこで、後編ではおもにこれらに視点を置きながら、近畿病院図書室協議会（病図協）での活動を振り返りたいと思います。

II. 阪神・淡路大震災

京都に住む私でも、1995年1月17日早朝の、あのただならぬ「揺れ」は今も体が覚えています。当時の日記風の報告記¹⁾を読み返すと、つたない文章ながらも徐々に薄れていった細かな記憶が昨日のこのように思い出されます。あれほどの大災害の場合、病図協として何をすべきか、咄嗟にはわからなかったのが正直なところです。テレビや新聞の報道によって想像を絶する悲劇的な状況はわかったけれど、京都からは電話も交通機関も通じなかったため、数日間、全会員の消息はなかなかつかめないう状態でした。

そこで、院内には反対の声もあったのですが、その週末、まずは大阪から阪神電車が動いてい

た西宮市を訪れることから始めました。以後2月末まで毎週末、阪神間の会員病院へ直接足を運んでお見舞いし、状況を確認しました。無残な大災害であるにもかかわらず、訪問先の皆さんの予想外に平静で明るい表情が印象的でしたし、被害者でもありながら当地で私に同行していただいた図書館員の方々の優しい心遣いも、うれしい限りでした。また、1月末に集計した被災状況調査¹⁾では、19機関の会員が書架や機器の倒壊など大きな被害を受けていることがわかりました。幸いにも人災がなかったことが何よりでした。

その後、5月末の会員有志によるボランティア活動²⁾は、病図協として初めての試みでもあり、新たな図書館間協力活動の可能性を実感しました。さらに、この活動は自主企画による運営だったため、受入先との手続きや参加者の保険加入あるいは交通手段の確保など、自然災害へのボランティア活動は善意だけでは実行できないことを学ぶ機会にもなりました。なお、同年3月に東京で地下鉄サリン事件があって、被害者が搬送された聖路加国際病院では図書館員が情報収集に活躍されました。そこで、秋の日本病院会全国図書室研究会では「危機管理と司書の役割」をテーマにシンポジウムが企画され、私も「阪神大震災と図書館員」というタイトルで報告いたしました³⁾。後にも先にも1995年は、私なりに最も事務局長を自覚した年であったといえます。

III. インターネット

インターネットの可能性については、1994年

こだなか てつや：国立病院機構京都医療センター

秋の「創立20周年フォーラム」において、当時医学界でインターネットの草分けだった辰巳治之先生（札幌医科大学助教授）に講演していただいたばかりでした。そもそもインターネットは、米軍が核戦争に備えた1960年代終り頃のARPANETから出発しただけに、震災時における情報の発信と受信ではその強みを発揮して、日本でも一躍注目を浴びました。

当時は、今と違って接続に必要なプログラムファイルは自分で別に入手し、その設定を手入力しなければならず、パソコンが苦手な人には敷居が高かったようです。私の場合も、インターネットの導入は院内では初めてだったので、英語版の分厚い“Internet Starter Kit”を購入しました。それと引っ引きでMacintoshに接続し、ようやく自分のデスクトップ上に欧米のホームページ（実はPenthouse）が現れた時は感動したものです。その頃のホームページはダイアルアップを前提にしているためか、Yahoo!などのサーチエンジンも一般サイトにしても素朴な軽いものでした。そのため、情報の量や質では物足りなさもありましたが、メールの便利さは格別でした。また、今のようなおびただしいスパムやウイルスも皆無に等しく、ほとんどの利用者はアドレスを公開していました。今やウェブ上の情報は質量ともに大幅に向上するとともに、インタラクティブなデータベース機能が充実し、文献検索はもとより、買い物、ホテルや交通機関の予約など、すっかり日常生活に浸透しました。その代わり、地雷が仕掛けられた危険なページや自殺サイトなど、負の部分も「充実」という弊害が生じたのは、皆さんもご存じのとおりです。

事務局長の役割と思ったわけではないのですが、当時、会員の病院図書館でのインターネットの普及と活用を図りたいと考えていました。そのため、会誌にはかなり長文の解説記事を精力的に書きました。その中身は、医学情報入手のツールとして⁷⁾、とりわけMEDLINE検索に有用⁸⁾、かつ電子メールを大いに活用しましよ

う⁹⁾といった調子です。さらに、図書室からの情報発信⁷⁾や、裏ネタ⁸⁾¹⁰⁾にも手を出しました。また、病図協のホームページも開設しました。1996年10月に個人URL内で開設し、翌1997年9月には独自のドメイン(hosplib.org)を取得して、現在の“http://www.hosplib.org”にURLを移転しました。その後、後述する共同事業のフォリオやその発展形であるリテリスに、このドメイン内サーバースペースを提供するという太っ腹なところを見せています。現在の悩みは更新が遅れがちなこと、早急に次の運営編集委員にバトンタッチしたいと思っています。

IV. 共同事業

1974年11月の病図協発足に約1年半遅れて、1976年3月、関東に病院図書館研究会（病図研）が発足しました。両者は機関加盟制か個人加盟制かという違いはあるものの、同じ分野で同じような立場の、おもに病院図書館関係者の集まりでした。ところが、ネットワークの考え方に隔たりがあって、組織間の交流提携は率直にあってあまり密ではなく、会誌交換程度のお付き合いでした。強いていえば、前編で紹介した日本病院会全国図書室研究会の関西での開催を通して、両者の会員が年1回顔を合わせていたことが唯一の組織的交流といえました。

1996年の春、長谷川湧子氏の病図研会長就任を機会に、組織的基盤の違いはあるものの、同じ病院図書館同士、何か新しい形の協力形態を組めないか探ることにしました。そこで、6月に名古屋で、9月には京都で、お互いに数名の役員が出席して懇談会を持ちました。その結果、両者は協力提携の方向で認識が一致し、共同事業の実現に向け、東京と京都で「共同事業運営会議」を年2回開催することになりました。この会議は、翌1997年5月に聖路加国際病院で開催された第1回会議から2000年7月の第7回会議（聖路加国際病院）まで4年間にわたり続けました。なお、2000年11月に京都での開催が予

定されていた第8回会議は、病図研から延期の通告があり、その後ついに開催されることなく終わりました。そのあたりの事情は、会誌の第27回総会報告の中で詳しく報告されているので¹¹⁻¹²⁾、ここでは省きます。

共同事業は、両団体による実現化を目的とした二つの具体的な事業で構成されていました。一つは、共同運営によるホームページの開設です。当時は、まだ認知度が低く病院図書館関係者も十分には活用していない有用なウェブサイトが数多くありました。その水先案内役になることを目指し、「フォリオ／folio」の形でホームページの開設を実現しました。フォリオは、両者の会員に愛用されるだけでなく、1998年には財団法人 AVCC 高度映像情報センターの“good site”にも指定されました。もう一つは、病院図書館員の専門性を高め、社会的地位の向上を目指す認定資格制度の実施です。担当委員の熱心な努力の甲斐もあって、立派な教育カリキュラムを備えた「病院図書館員認定資格制度」として実施直前まで作業は進みましたが、結果的には報告書を両会長に提出するに止まりました¹³⁾。

こうして共同事業はいわば頓挫したわけですが、今もって釈然としないものがあり、何か別の方策はなかったかと残念に思います。しかし、その後の病図研の動きを垣間見ると、あの時点で中断しておいたから傷が浅くてすんだのではないかと考えたりもします。ただ、この共同事業は全くムダに終わったわけではなく、その後も個人レベルの交流は形を変えて続いています。「フォリオ」は終了しましたが、両団体の有志によって2001年7月1日に「リテリス／LITERIS」(<http://www.hosplib.org/literis/>)が開設され、今日に至っています。また、認定資格制度を担当したメンバーは病院図書館へのEBM普及を図るため、「EBL (Evidence-based Librarianship) 研究会」を発足させ、ワークショップの開催を試みました。さらに、日本医学図書館協会 (JMLA) はこの認定資格制度実現

の動きに触発されたのか、2003年11月に「ヘルスサイエンス情報専門員」制度を発足させ、JMLA 会員外の病院関係者にも門戸を開放しています。

V. Evidence-based Medicine (EBM)

2000年12月25日、愛知淑徳大学の山崎茂明教授から私あてに1通の依頼メールが届きました。それが、京都大学の福原俊一教授や中山健夫助教授と私たち病院図書館員が結びつくきっかけでした。

それまで、Evidence-based Medicine (EBM) について漠然とした知識しかなかった私たちが、診療ガイドライン策定のために協力してほしいと中山先生からお話があった当初、正直いって躊躇しました。ともかく、文献検索をこれまでも増して重視する医学の方法論ということで、図書館員の可能性を広げるものにとらえ、不安ながら賭けてみることにしました。そこで、2001年1月に京都大学大学院医学研究科社会健康医学系との「EBM 情報システム・ワーキンググループ活動」を病図協の組織的活動とすることで幹事会の了承を得ました。その後は、図書館員6名からなる作業班の編成、ワーキンググループ会議の開催から検索作業の実施へと、矢継ぎ早に活動を進めました¹⁴⁾。当面は、厚生科学研究費補助金による慢性関節リウマチ診療ガイドライン作成での文献検索が役割でしたが、その年6、7月の京都大学大学院での「臨床疫学 EBM 特別ワークショップ」にも文献検索の講義と実習で協力し、毎年恒例となって現在も続いています¹⁵⁾。また、当診療ガイドラインについては、その後もデータ処理や編集作業で協力し、2004年4月に財団法人日本リウマチ財団から発行されて所期の目的を達成しました¹⁶⁾。

当時、東京から京都大学に着任されたばかりの中山先生のお話では、この目論見は西日本での図書館員を巻き込んだEBMの実践とのことでした。その意図に沿えたかどうかは怪しいと

して、医学研究者とのワーキンググループ活動は、私には単なる検索作業に止まらず、それまでにない交流の広がりをもたらしてくれました。厚生労働科学研究班活動への参加や医学雑誌への原稿執筆などを通じて、多士済々の方々を知ることになり、多くを教えていただきました。文献検索とそのデータ処理作業は決してラクばかりではありませんが、優秀かつ前向きな図書館員の協力者に恵まれたこと、何よりも図書館員をよく理解された教育・研究者に恵まれたことに、感謝の言葉もありません。

なお、病図協での福原先生や中山先生の講演や会誌への執筆¹⁷⁾は、ある意味この EBM 情報システム・ワーキンググループ活動の延長といえましょう。また、2004年4月以降は私的な活動となりましたが、現在も嚙下障害や禁煙治療の診療ガイドライン作成に協力させていただいており、図書館員の新しい協力メンバーともども、その度に学ぶことの多い文献検索に携わっています。

VI. 著作権法

病図協内で、本格的に著作権法との関係で病院図書館を意識したのは、1998年3月の第24回総会における塩見昇大阪教育大学教授の講演だったといえます。そして、2000年10月の創立25周年記念フォーラムでのシンポジウム「病院図書館と著作権」で決定的となりました。以下にそのプログラムを挙げてみると、現在の論点をこの時すでに見越していたかの感があります。

創立25周年記念フォーラム

(2000年10月28日開催/於:京都市国際交流会館)
記念講演:「医学と生命倫理」加茂直樹(京大女子大学教授)

シンポジウム:「病院図書館と著作権」

座長:粉川皓仲(国立京都病院院長)

副座長:小田中徹也(国立京都病院司書)

基調講演:

- (1)「著作権の法的側面、その趣旨と目的」黒澤節男(九州芸術工科大学教授)
- (2)「デジタル情報化時代における著作権の現況」名和小太郎(関西大学教授)
- (3)「病院の機能と図書館への期待」中村充男(社会保険神戸中央病院院長)
- (4)「病院図書室における医学情報サービスと著作権」山室真知子(京都南病院司書)
- (5)「医学情報の現況と独自性」首藤佳子(星ヶ丘厚生年金病院司書)

このなかで、外部からお招きした黒澤先生と名和先生とは全くツテも面識もなく、いきなりメールで講師をお願いするという無謀さでした。にもかかわらず快く講師を引き受けてくださり、著作権法の厳しい現実を教えていただくとともに、病院図書館へのご理解と暖かいご助言をいただきました¹⁸⁾。

この後、2001年7月25日と2004年8月31日の2回にわたり、病図協として文化庁を訪問し、病院図書館の実情を説明するとともに著作権法第31条適用について要望しました。1回目は孤軍奮闘の感もありましたが¹⁹⁾、2回目は文化庁が著作権法改正に向けて関係団体に要望やパブリックコメントを募集していた時期でもあり、病図協以外の病院図書館関係者も加わり、雰囲気は様変わりしていました²⁰⁾。また、この文化庁訪問にあたっては、株式会社サンメディアの松下茂氏にお世話になったことを付記しておきます。

VII. 歴代会長・総会講演一後編

1995年1月の阪神・淡路大震災では、当時会長だった白方誠彌先生(淀川キリスト教病院院長)のご自宅が西宮だったため、関係者一同、安否が心配でしたが幸い事なきを得て安堵しました。そして翌1996年4月からは牧野尚彦先生(兵庫県立尼崎病院院長)、1999年4月からは粉川皓仲先生(国立京都病院院長)、2001年4月からは中村充男先生(社会保険神戸中央病院院長)

へと引き継がれ、2003年4月から現在まで清水聡先生（京都南病院長）が会長に就任されております。

前編でも触れましたが、歴代の会長に私は事務局長としてよくしていただきましたし、かわいがられた方だとうぬぼれています。後半の10年間にお世話になった先生方も、同じく図書館員のことを親身になって考えてくださり、病図協の運営にも尽くしていただきました。聡明さが際立った牧野先生は、純粹に図書館の充実を考えておられただけに、お会いする度にある種の緊張感を伴ったものです。粉川先生は牧野先生と同窓同期ですが、当院の院長でもあったことから、身びいきにされること、しかられること、格別でした。粉川先生は明るく実行力のある方でもあり、創立25周年記念事業を積極的に推進され、幹事をはじめとする図書館員とも食事会などで気さくにされていたのが、今となっては懐かしい思い出になっています。中村先生や清水先生の代になると、私の方がベテラン扱いになってしまい、やや遠慮がちにされているのではないかと気にしていましたが、肝心の時はやはり教を請うこと度々でした。

次に前編に準じて、1995年から2004年まで後半10年間の総会講演を挙げます。講師の先生方は、会長や私の紹介、推薦などさまざまですが、それぞれの分野で業績のある著名な方々だけに、さすがに印象深い講演でした。

第21回：訪問看護について／高沢洋子（淀川キリスト教病院）

第22回：コンピュータ・ネットワークの現状と展望／山本隆一（大阪医科大学中央検査部助手）

第23回：医学書の企画から出版まで／中村秀穂（医学書院常務取締役）

第24回：図書館員教育の今日的課題／塩見昇（大阪教育大学教授）

第25回：精神科の図書について／中井久夫（神戸大学医学部名誉教授）

第26回：病草紙にみられる疾患とその今日的

意味／荻野篤彦（国立京都病院皮膚科医長）

第27回：ハンセン病の昔と今／中井栄一（国立療養所長島愛生園園長）

第28回：女性の人権を守るための5つのキーワード／赤松彰子（里の家助産院院長）

第29回：治療困難となった癌患者に対する緩和ケア病棟の役割／八木安生（社会保険神戸中央病院内科部長）

第30回：EBM時代のQOL／福原俊一（京都大学大学院医学研究科・医療疫学教授）

VIII. おわりに

結果的とはいえ、私は20年もの永きにわたって病図協の事務局長をなんとか務め、2004年の春ようやくその任務を解かれました。前編の冒頭でも述べましたが、それは会長をはじめとする役員、会員、さらには病図協外の多くの皆さま方のご支援があったからであり、重ねてここにお礼申し上げます。幸い、私の後任として社会保険神戸中央病院の林伴子さんが2004年4月から引き継がれ、事業も順調に消化されています。今後の病図協あるいは病院図書館は、次世代の方々に全て託されています。願わくはさらに発展し、医療の一端をまっとうに担い、社会に寄与していかれますよう期待しております。

最後に、文中の肩書、所属機関は当時のままであり、敬称を略させていただいた箇所があることをお断り申し上げます。即心、長い間ありがとうございました。

参考文献

- 1) 小田中徹也：地震と病院図書室 阪神大震災への協議会の対応。病院図書室。1995；15(1/2):19-24.
- 2) 小田中徹也：阪神大震災その後：被災会員へのボランティア活動。病院図書室。1995；15(3):70-2.
- 3) 小田中徹也，河合富士美，野田義一他：シ

- ンポジウム 危機管理と司書の役割. 日本病院会雑誌. 1996 ; 43 (5) : 735-59.
- 4) 小田中徹也 : インターネットと医学情報. 病院図書室. 1995 ; 15 (3) : 82-97.
 - 5) 小田中徹也 : Free MEDLINE への招待. 病院図書室. 1997 ; 17 (4) : 122-34.
 - 6) 小田中徹也 : 1999年秋、これから電子メールを始める人のために. 病院図書室. 1999 ; 19 (3) : 131-40.
 - 7) 小田中徹也 : 病院図書館の可能性を探るアメリカの病院図書館ウェブページにみる図書館サービス. 病院図書館. 2001 ; 21 (1) : 6-10.
 - 8) 小田中徹也 : 人には知られたいくないホームページ. 医学図書館. 1997 ; 44 (4) : 428-30.
 - 9) 小田中徹也 : ウェブに跋扈する怪獣や昆虫たち—怪獣編—. ほすびたるらいぶらりあん. 2000 ; 25 (3) : 61-2.
 - 10) 小田中徹也 : ウェブに跋扈する怪獣や昆虫たち—昆虫編—. ほすびたるらいぶらりあん. 2000 ; 25 (4) : 135-7.
 - 11) 第27回総会報告 : I-2-5 共同事業. 病院図書館. 2001 ; 21 (2) : 84-5.
 - 12) 第27回総会報告 : 平成13年度事業計画 (補足) 「5. 共同事業」について. 病院図書館. 2001 ; 21 (2) : 87-8.
 - 13) 平成13年度近畿病院図書室協議会第1回幹事会における、共同事業の取扱いについての協議結果報告 (平成13年4月19日開催). 病院図書館. 2001 ; 21 (2) : 90.
 - 14) 小田中徹也, 首藤佳子, 松本純子他 : 診療ガイドライン作成におけるメソドロジストと病院図書館員とのワーキンググループ活動. 医学図書館. 2001 ; 48 (4) : 418-23.
 - 15) 小田中徹也, 中山健夫, 福原俊一 : 医学系大学院での EBM ワークショップ 図書館員の参加とその効果. 医学図書館. 2003 ; 50 (2) : 150-4.
 - 16) 厚生労働省研究班 / 越智隆弘, 山本一彦, 龍順之助編. 診断のマニュアルと EBM に基づく治療ガイドライン (関節リウマチの診療マニュアル改訂版). 東京 : 日本リウマチ財団 ; 2004.
 - 17) 小田中徹也 : EBM とライブラリアン “What’s EBM?” 連載を終えて、中山健夫先生に聞く. 病院図書館. 2005 ; 25 (1/2) : 38-44.
 - 18) 特集 : 病院図書館と著作権. 病院図書館. 2000 ; 20 (4) : 140-65.
 - 19) 小田中徹也 : 文化庁訪問報告. 病院図書館. 2001 ; 21 (3) : 138-40.
 - 20) 小田中徹也 : 著作権法改正に関する文化庁への要望書提出. 病院図書館. 2005 ; 24 (4) : 193-6.

